

山古志錦鯉養鯉

山古志地域は、古くから「生きた宝石」と呼ばれるほど美しい錦鯉の生産地として知られています。この錦鯉の養鯉はやがて日本中に広がり、数十億円規模の国際産業の創出につながりました。長岡地域の錦鯉養鯉業者約 150 社のうち、約 90 の商業用および趣味の養鯉場が山古志に拠点を置いています。最高水準の飼育と品質を提供する生産者から錦鯉を購入するため、毎年多くの人々が養鯉場を訪れます。通常、養鯉場の訪問は要予約ですが、一部の錦鯉が飼育されている棚田や棚池は今でも山古志全域で見ることができます。

錦鯉と棚田の見られる場所

長岡市山古志支所の屋外や、隣接するやまこし復興交流館おらたる内の水槽では、大きく生き生きとした錦鯉が泳ぐ姿を見られます。おらたるの水槽には公式に認定されている錦鯉の体色のパリエーションが記載されているシートが掛けられています。

現在では錦鯉はいくつかの専用の養鯉場で飼育されていますが、谷の急斜面にある棚田では、今でも夏には昔と同じように鯉を飼育するために使用されています。山古志周辺の指定されている展望ポイントからは、棚田や棚池の景色が一望でき、特に水面に色とりどりの夕日が反射する初夏の光景は感動的です。薬師の陵のほか、にこにこひろばや山古志支所裏の展望台、古志高原スキー場の近くの「一本杉」も人気のスポットです。

山古志の錦鯉養鯉の歴史

山古志での錦鯉の養鯉は約 2 世紀前に始まりました。もともと村人は冬の食糧として黒の真鯉を飼育していました。春に真鯉の卵を棚田に移し、孵化した稚魚は稲作とともに成長していきます。鯉がある程度の大きさに達すると、棚田上の専用池に移動し、雪が降る前に保護された家庭用池に移されました。19 世紀初頭に、黒い真鯉の中に赤い模様の鯉が発見され、交配に使われたと言われています。それ以来数年にわたる品種改良により約 100 種類の異なる体色の錦鯉が誕生しました。

1914 年の東京大正博覧会の後、山古志錦鯉は全国的に知られるようになりました。1916 年に雑種交配が導入され、さらに多様な体色の色彩が誕生しました。時が経つにつれ、山古志錦鯉は海外のバイヤーや鯉愛好家の間で人気を博すようになり、山古志の養鯉者は錦鯉を初めて海外に販売した業者の一つとなりました。2004 年に発生した新潟県中越地震により、山古志の養鯉場は大きな被害を受けましたが、全国の他の飼育者や鯉愛好家の協力を得て経営を再建し、復活させることに成功しました。現在、山古志の錦鯉は世界中の池で珍重されています。販売シーズンになると、自身の「生きた宝石」を選ぶために世界中から買い手が集まり、山の村はにぎやかな市場となります。